

# 小学校教師における教授ストラテジーと授業経験の関係

## A Study on Relation between Teaching Strategy and Experience in Teaching

矢崎 理恵 (Rie Yazaki) 指導：浅田 匡

### 【問題と目的】

教師は多かれ少なかれ、自らの教育的価値の実現と、学習者の成長あるいは変容を目指し、“ストラテジー”に基づいた教授行動を行っている。したがって、教師が持つ教授ストラテジーに焦点を当てることは、授業実践において、種々の指導目標を達成するための手がかりになると言えよう。しかしながら、先行研究における教授ストラテジーの捉え方は、研究者の解釈によって様々であり、まだ合意された概念には至っていない。したがって、本研究では、Strasser, B (1972)、西之園 (1981)、Mintzberg (1987) の概念を主軸とし、教授ストラテジーを次のように定義することとした。事前に教授行動および教授行動の順番を決定する思考の枠組み (①) および教授行動や教授行動の順番を変更する思考の枠組み (②) を合わせたものが教授ストラテジーである。本研究は、前述の教授ストラテジーの定義に基づき、小学校教師の教授ストラテジーを記述し、それに関わる要因を明らかにすることを目的とする。また、対象とした事例を比較し、教授ストラテジーおよび教授ストラテジーに関わる要因の差異について検討を加える。

### 【方法】

対象：埼玉県内の市立小学校教師3名 (教師A：教職経験14年の男性教諭、教師B：教職経験10年の女性教諭、教師C：教職経験3年の男性教諭) およびその学級を対象とする。授業は、小6算数「速さの表し方を考えよう」である。

期間：2014年9月～10月

内容：授業VTRおよびインタビューのプロトコルデータを用い、対象教師が持つ思考の枠組みを整理する。

### 【結果と考察】

#### (1) 教授ストラテジーの概観

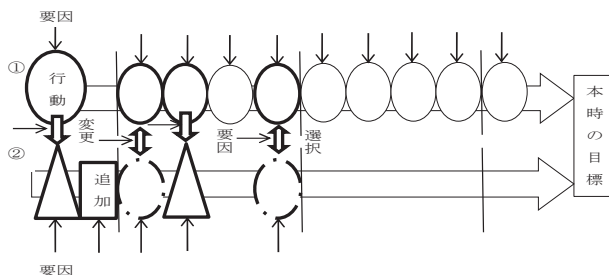


図1：教師Aの教授ストラテジー

対象教師の教授ストラテジーを、図1のように記述した。

#### (2) 教授ストラテジーに関わる要因

設計段階における教授ストラテジーに関わる要因の比較

により、教材教授経験を重ねるにつれ、理想の授業→本時の授業→単元 (年間計画) の中で本時の授業、と教師の視点が移り変わることが示唆された。また、教師が教授行動を考慮することのできる場面は、教材教授経験による影響を受けている、と考えられる。

実施段階では、児童の様子や授業のつながりを考慮している教師Aと、時間内に予定範囲まで終わらせることを考慮している教師Cとの間では、関心意欲の向上のような要因が考慮できるかは教授経験の差異と言える。

評価段階では、予想と異なる児童の反応に合わせて計画を変更するというような授業経験によって、事前に授業の状況を想定できるか否かの差異が生じていると言える。また、教授経験の浅い教師から代替案レベルの要因が抽出されなかったことから、教授経験によって、持ち合わせている手立ての数に差異があり、そのことが教授行動の順番を決定する、あるいは変えるということに差異が生じたと考えられる。尚、設計段階および評価段階の時間軸に沿った比較により、教授経験の浅い教師は、設計段階において考慮できなかった場面を、授業実施後の気づきによって改善しようとしていることが示唆された。

以上より、教師が持つ教授ストラテジーは、教授経験にかかわらず、実施した授業による影響を受けることが示された。しかし、授業経験の内容は、教授経験、特に教材教授経験により差異があり、教授ストラテジーに意味のある授業の位置づけ (視点の移り変わり) や授業での児童とのやり取りを“具体的に” 想定できるか否かといったことに関連することが示唆された。

### 【今後の課題】

単元や年間計画といったマクロな枠組みの中で本時というミクロな枠組みをどのように位置づけていくのか、教授ストラテジーの定義そのものに対するさらなる検討が求められる。

### 【参考文献】

- 西之園晴夫『教育学大全集30 授業の過程』第一法規、1981
- Mintzberg, H. “Five Ps For Strategy”, Fall, California Management Review, 1987.
- Strasser, B. “A Conceptual Model of Instruction”, Stores, E. & Morris, S. (ed.), Teaching Practice; Problems and Perspectives, Methuen, London, 1972